



次の50年の日本のかたち — 智恵出づる国 —

安東 泰博*

ちょうど1年前の本誌に、「宙船（そらふね）」のタイトルで巻頭言を書かせていただいた。比較的好評であったので、柳の下の2匹目のドジョウをねらって再び音楽ネタで始めます。

今回も、やはり中島みゆきの作詞・作曲で吉田拓郎も歌っている「永遠の嘘をついてくれ」という曲である。つま恋コンサート2006での二人のデュエットが有名である。今回のお気に入りのフレーズは歌詞の3番にあらわれる下記である。

「人はみな／望む答だけを聞けるまで／尋ね続けてしまうものだから」

この言葉は人間心理の本質についていると思う。皆さんも何度上司に説明しても、納得してもらえなかった経験がおありでしょう。何度も同じことを質問されることもあったかと思う。当人の信念や思い込みから外れた意見や提案は、いくら理路整然と説明されてもなかなか受け入れられないものだ。同様な言葉をユリウス・カエサルも言っている。「人間ならば誰もが、現実のすべてを見ているわけではない。多くの人は見たいと欲する現実しか見ていない。」人間というのは不便な動物である。

同じことが国民レベルでも発露しているのかもしれない。今の日本は少子高齢化、製造業の空洞化、階層間や世代間の格差拡大など、構造的な危機状態にあるにもかかわらず、バブル以前の高度成長社会を再び夢見るような経済再生ばかりを議論している。謙虚に状況を見つめ、受け入れる時期にきているようだ。

近代日本の発展史を観てみると、いつもそれなりのスローガンがあった。

明治時代：富国強兵 殖産興業

戦前 は：亜細亜の盟主

戦後 は：経済大国 技術立国

ところが1990年以降、バブル崩壊の影響もあるが、むしろ日本が世界のトップランナーの一員となった頃から日本人は方向性を見失っているように思われる。これからの日本人は、日本という国は、何を目標に進んでいけばよいのだろうか。旧産業は順次新興国にその主導権を奪われていくというのは歴史の教えるとおりである。日本も繊維などの軽工業から重工業、半導体産業、自動車と欧米先進国の産業を追い越してきた。この歴史的展開を考えると、新たな産業の創成と普及が先進国の使命であり、生き残りの戦略であろう。ITのソフトウェアではアメリカにしてやられてしまった。これを追いかけるだけの戦略ではこれまでの後追い、同じことの繰り返しになる。日本独自の将来ビジョンが欲しい。

日本は科学技術の進展を犠牲にして文化の熟成を図った江戸時代という一時期をもつ。この時代に①宗教の呪縛からの離脱、②自給自足経済、③芸術の民衆化、④「もったいない」の生活などを確立してきた。欧米先進文化をいったん通り抜けた日本は、この江戸時代の生き方と近代科学文明を融合した新しい精神文化を創造できるのではないか。そして、それを世界に発信し、人類の生き方に新しい道筋を示せるのではないかと思う。①自然との共生、②多様性の受容、③繊細な食文化、④「道」の文化（華道、茶道、書道……）等々、人類の持続的発展に資する文化、智恵の創成と拡散を通じて、世界から尊敬される充実した共同体を目指したい。このたびの東日本大震災と原発事故は日本人のライフスタイルに対する考え方を大きく変貌させる可能性があり、日本の方向性を考え直す良い機会でもある。

さて、次の50年のスローガンとして、聖徳太子の言をもじって「智恵出づる国」はどうか。21世紀の人類のあり方、生活、文化、経済、科学などについて新たな智恵を創出し、世界に向けて発信できる国造りを目指そうではないですか。